

終戦前の辞典に示された複合動詞のアクセントをめぐって : 帰納的記述と演繹的規範

著者	塩田 雄大
雑誌名	国立国語研究所論集
号	7
ページ	251-264
発行年	2014-05
URL	http://doi.org/10.15084/00000534

終戦前の辞典に示された複合動詞のアクセントをめぐって

——帰納的記述と演繹的規範——

塩田 雄大

NHK放送文化研究所／国立国語研究所 共同研究員

要旨

複合動詞のアクセントは、前部動詞の反対の式をとると言われている（式保存の逆転現象）。前部動詞が平板式であれば複合動詞は起伏式に、また前部動詞が起伏式であれば複合動詞は平板式になるというものである。しかし運用実態としては例外も多く、前部動詞が起伏式・複合動詞も起伏式というものが、少なからずある。

この「複合動詞アクセントの式保存の逆転現象」という一般化を導き出したのは、三宅武郎（1934）である。本稿では、三宅が主な編集を担当した2冊の辞書（国語辞典のアクセント注記と、アクセント辞典）を中心として、その記述の中に「式保存の逆転現象」に合致するものがどの程度見られるのかをめぐって、考察を進める。

この2冊の辞書で示されている複合動詞のアクセントは、同時期のほかのアクセント辞典での掲載内容と比べて、「式保存の逆転現象」に忠実すぎる〔＝おそらく実態とはいくらかのずれがある〕様相になっていることを、計量的に示す。

この事実は、一般的法則として三宅が帰納的に指摘した「複合動詞アクセントにおける式保存の逆転現象」が、その後に彼の成したアクセント記述・アクセント辞典編纂に対して、演繹的に「過剰適用」されてしまったこと、すなわち、「規範」の提示にあたって、「実態」の考察を通して得られた「傾向」を、「原則」にまで高めてしまったものとして、解釈することができる*。

キーワード：複合動詞，アクセント，三宅武郎，規範，実態

1. はじめに

「複合動詞のアクセントは前部動詞の反対の式をとる〔＝前部動詞が起伏式であれば複合動詞は平板式であり、前部動詞が平板式であれば複合動詞は起伏式である〕」という一般化が最初に示されたのは三宅武郎（1934）においてであり、同書にはその原案が1929（昭和4）年4月の音声学協会研究会において発表されたものであると記されている¹。三宅は吉沢義則編（1938）『アクセント表示 新辞海』のアクセント記述担当者であり、日本放送協会編（1943）『日本語アクセント辞典』の編纂主任である（塩田雄大2008, 2013）。

本稿では、一般的法則として三宅が帰納的に指摘した「複合動詞アクセントにおける式保存の逆転現象」が、その後に彼の成したアクセント記述・アクセント辞典編纂に対して、演繹的に「過剰適用」されてしまったこと、すなわち、「規範」の提示にあたって、「実態」の考察を通して得られた「傾向」を、「原則」にまで高めてしまったのではないかということを、問うてみる。なおデー

* 本稿の一部は、国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」（プロジェクトリーダー：相澤正夫）の研究成果である。

¹ この現象は「山田（美妙）の法則」と呼ばれることがあるが、それに対して一考の余地があることについては、塩田雄大（2013）の注2を参照。

タの一部は、塩田雄大 (2009) でも紹介したことがある。

2. 三宅武郎とアクセント研究

最初に、三宅武郎の背景について整理しておく。

三宅武郎は、1892 (明治 25) 年に広島県山県郡壬生町で生まれた (秋永一枝 1999: 216)。東京のアクセントに関して、1924 (大正 13) 年から築地・日本橋・京橋の下町方言を中心に調査をおこなってカードに採集した。カードの枚数は1930 (昭和 5) 年の時点で4万2,000枚に達したとのことである (三宅武郎 1934, 1938)。1937 (昭和 12) 年には三宅の手もとに常用語約5万枚のアクセントカードができあがっていたという記録もある (服部愿夫 1937)。また、山田美妙『日本大辞書』の全語彙もカード化している (三宅武郎 1969)。

1934 (昭和 9) 年に発足した日本放送協会の放送用語委員会には、当初から囑託の用語調査係員として従事していた (金田一春彦 1994, 塩田雄大 2007b)。最初の仕事として「放送用語の調査に関する一般方針」の原案起草が挙げられる (三宅武郎 1937)。

三宅がアクセント記述を担当した吉沢義則編 (1938)『アクセント表示 新辞海』は、「五万五〇〇〇語 五十音順。通俗辞典としてはじめてアクセントを字の右に線を施して表示した (図1)。担



図1 『アクセント表示 新辞海』

当は日本放送協会・三宅武郎で、巻頭にアクセントの話六頁を付す」(惣郷正明・朝倉治彦編(1977)『辞書解題辞典』)と解説されている。アクセントの表示にあたっては、辞典の編集担当者が三宅のカードを見ながらアクセントの線を切り貼りしたもので、誤植も少なくない(塩田雄大(2008)の注10)。また、平版印刷ではなく輪転機にかけたために、アクセント記号の線の墨付きが悪くてきちんと印刷されていないところが少なくないことを三宅はやや後悔している(三宅武郎1952)。掲載されたアクセントに関して、大西雅雄(1951)では「三宅氏(広島県人)の四十余歳の時の東京的主観」であるという評価が示されている。

また、日本放送協会編(1943)『日本語アクセント辞典』では編纂主任として中心的な活動をおこなった。同書の序(新村出執筆)には「本辞典の作成につきては、囑託三宅武郎氏其他の編纂係員及び放送員諸氏の少からぬ努力を銘記せねばならぬ」と特に実名をあげて記されている。三宅本人の言によると、掲載されたアクセントのうち「カ行」の途中までは外部識者である放送用語委員とアナウンサーたちとの共同によって作業が進められたが、それ以降の語については三宅の個人作業であった(三宅武郎1952)。このことは、現在NHK放送文化研究所に残されている会議資料によってもほぼ確かめられている。おそらく三宅のアクセント記述と放送用語委員各人のアクセントとの間にはいくばくかの食い違いがあったと思われ、『日本語アクセント辞典』が1943年に発行された直後から、放送用語委員会(この当時の名称は「ニュース用語調査委員会」)ではこの『日本語アクセント辞典』に掲載されたアクセントの再検討を始める(塩田雄大2008)。

三宅はアクセント関連の著作として、上記以外に三宅武郎(1934)、三宅武郎・興水實(1941)、三宅武郎(1943)なども記している。

日本放送協会では三宅が放送用語の仕事にあっていたのは、1933(昭和8)年から1943(昭和18)年の間であると推定される(ただし、三宅自身の記述として「NHKの放送用語の調査に私が関係したのは七年あまり」(三宅武郎1952)というものもあり、確定できない)。日本放送協会勤務後には文部省調査局国語課員となり、1983(昭和58)年に死去した(市川重一1984)。1941(昭和16)年には、「海外進出日本語教師養成講習会」の講師(敬語法概説)を担当している(松永典子2008:48)。1950(昭和25)年の時点での肩書は「文部事務官」となっている(三宅武郎1950)。

3. 1939(昭和14)年「連語動詞のアクセント法則(稿)」

日本放送協会編(1943)『日本語アクセント辞典』を出版する準備段階として、放送用語委員会におけるアクセント関連の調査・審議が1936(昭11)年末から始まっている。その後、1939(昭14)年4月には『日本語アクセント辞典』の仕上がりイメージを手書きで示したと思われる「放送アクセント辞典(ア行の部)」という資料が作成された。これは、「ア」から始まる語のアクセントが示されたものである。

そして同年6月に「連語動詞のアクセント法則(稿)」という資料が作られている(図2)。これは、稿本である上記資料「放送アクセント辞典」に掲載された複合動詞も含め、複合動詞の「アクセント法則」(式保存の逆転現象)に合致していない項目を個別に取り上げたもので、「ア〜オ」で始まる57の複合動詞が掲げられている(塩田雄大2008)。おそらく三宅武郎が起案したものと

思われる。

まず「連語動詞のアクセント法則（稿）」の前半部分には、次のような説明が付されている（原文は縦書き）。

一. 上の動詞の原アクセントが平板式ならば、連語動詞の新アクセントは起伏式になる。

- [例] トブ（飛ぶ） トビ・ダス（飛び出す）
- アテル（当てる） アテ・ツケル（当てつける）
- トマル（泊まる） トマリ・コム（泊まりこむ）

二. 上の動詞の原アクセントが起伏式ならば、連語動詞の新アクセントは平板式になる。

- [例] ミル（見る） ミ・コム（見込む）
- カク（書く） カキ・ダス（書き出す）

三. 上の動詞がカナ三字以上の起伏式である場合には、場合に依つて次の如く二様にいふ。

- [例] オモウ（思ふ） (オモイ・コンデ（オモイ・コム）
- (オモイ・コンデ（オモイ・コム）

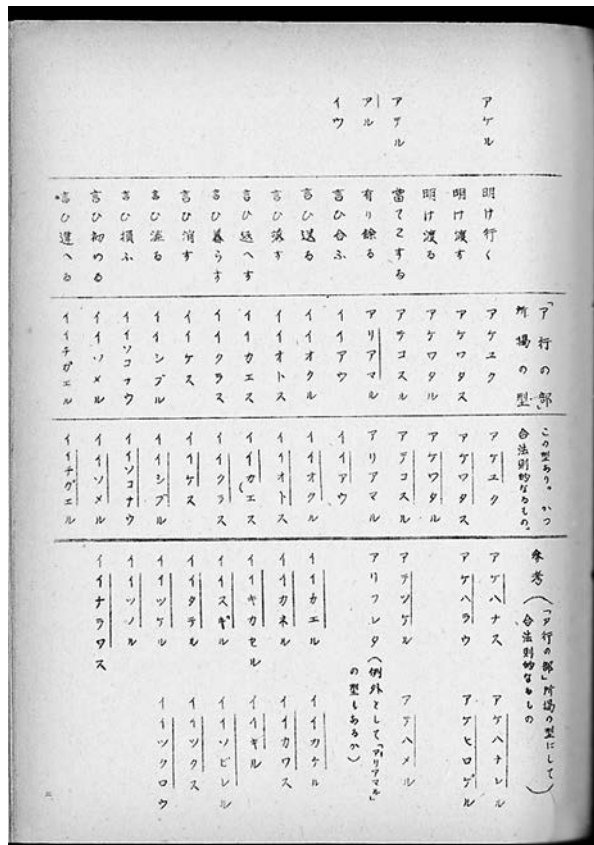


図2 「連語動詞のアクセント法則（稿）」

タ^ータク (叩く) タ^ータキ・ツケテ (タ^ータキ・ツケル)

語の意味が強いから殆ど常に右の如くいふ。

カンカ[°]エル (考へる) カンカ[°]エ・コンデ (カンカ[°]エ・コム)

カナの字数 (即ち音律単位の数) が多いから殆ど常に右の如くいふ。

式保存の逆転現象に関して、「連語動詞のアクセント法則 (稿)」の記述と、これより以前に発表されていた三宅武郎 (1934) 『音声口語法』とで異なるところは、上記「三。」の箇所である。三宅武郎 (1934) では前部 3 拍・起伏式のときには前部動詞のアクセントが生きる型 (「オモイコム」のような型、以下「前部型」とする) のみを示していたが、「連語動詞のアクセント法則 (稿)」ではこれ以外の場合によって平板型もあるという記述になっている。

「連語動詞のアクセント法則 (稿)」では、上記の記述に続いて、57 の複合動詞のアクセントが取り上げられている。原文 (縦書き) では発音カナにアクセント記号 (音調の高い部分に右傍線、平板型は傍線なし) を付した形で示されているが、これを筆者 (塩田) がアクセント核の位置 (最終拍からの逆算指定) を表す形式に整理し直したのが表 1 (次頁) である。各項目の内容は次のとおりである。

「(前部の式・拍数)」:

前部動詞について、式 (平板または起伏)、および連用形での拍数 (起伏式についてのみ) を、筆者 (塩田) が判定して記入した。判定が困難な動詞 (たとえば「いきる」) については、『日本語アクセント辞典』に示されたものを採用した。

「当初原案」:

「連語動詞のアクセント法則 (稿)」に示されている、当初の原案。原文では「[ア行の部] 所掲の型」と示されている。

「追加案」:

「連語動詞のアクセント法則 (稿)」に示されている追加案。「法則」に合致するものが示されている。原文では「この型あり。かつ合法則的なもの」と示されている。

漢字の字体・送りがなおよび歴史的かなづかい表記は、現代語のものに統一した。また、最終的な成果である 1943 年の『日本語アクセント辞典』と、金田一京助編 (1943) 『明解国語辞典』および神保格・常深^{つねみ}千里 (1932) 『国語発音アクセント辞典』の掲載状況も示した。

表1 1939年「連語動詞のアクセント法則（稿）」の記述と各種アクセント辞典の掲載状況

	(前部の式・拍数)	連語動詞のアクセント法則（稿）		『日本語アクセント辞典』（1943）	『明解国語辞典』（1943）	『国語発音アクセント辞典』（1932）
		当初原案	追加案			
明け行く	平	0	-2	(掲載なし)	(掲載なし)	(掲載なし)
明け渡す	平	0	-2	-2	-2	-2,0
明け渡る	平	0	-2	-2	-2	(掲載なし)
当てこする	平	0	-2	-2	-2	-2
有り余る	起・2拍	-2	0	0	0	-2
言い合う	平	0	-2	-2	-2	-2
言い送る	平	0	-2	-2	-2	(掲載なし)
言い落とす	平	0	-2	-2	-2	(掲載なし)
言い返す	平	0	-3	-3	(掲載なし)	-3
言い暮らす	平	0	-2	-2	-2	(掲載なし)
言い消す	平	0	-2	-2	-2	(掲載なし)
言い洪る	平	0	-2	-2	-2	(掲載なし)
言い損なう	平	0	-2	-2	(掲載なし)	(掲載なし)
言い初める	平	0	-2	-2	(掲載なし)	(掲載なし)
言い違える	平	0	-2	-2	(掲載なし)	(掲載なし)
言い伝える	平	0	-2	-2	(掲載なし)	(掲載なし)
言い詰める	平	0	-2	-2	(掲載なし)	(掲載なし)
言い渡す	平	0	-2	-2	-2	-2
居直る	平	0	-2	-2	-2	-2
射落とす	起・1拍	0,-2	0	0	(掲載なし)	0
射込む	起・1拍	0,-2	0	0	(掲載なし)	(掲載なし)
生き残る	起・2拍	0,-2	0	0	(掲載なし)	-2
いきり立つ*	平	-3	-2	-2	-4	(掲載なし)
行き渡る	平	0	-2	-2	(掲載なし)	-2
植え替える	平	0	-2,-3	-3	(掲載なし)	-3
浮き出す	平	0	-2	-2	(掲載なし)	-2
動き出す	起・3拍	0	0,-4	-2	(掲載なし)	-2
薄れ行く	平	0	-2	(掲載なし)	(掲載なし)	(掲載なし)
打ち落とす	起・2拍	0,-2	0	0	(掲載なし)	0
打ちこぼす	起・2拍	-2	0	0	(掲載なし)	(掲載なし)
売り付ける	平	0	-2	-2	(掲載なし)	-2
押し付ける	平	0	-2	-2	-2	-2
追っかける	平	0	-2	-2	-2	-2
威しつける*	平	-4	-2	-2	(掲載なし)	(掲載なし)
跳（おど）り上がる	平	0	-2	-2	-2	-2
思い合う	起・3拍	0	(掲載なし)	(掲載なし)	(掲載なし)	0
思い合わせる	起・3拍	0	(掲載なし)	0	(掲載なし)	(掲載なし)
思い合わせる	起・3拍	0	(掲載なし)	(掲載なし)	0	(掲載なし)
思い浮かべる	起・3拍	0	(掲載なし)	0	(掲載なし)	0
思い起こす	起・3拍	-2	(掲載なし)	0	0	(掲載なし)
思い返す	起・3拍	-2	(掲載なし)	0	0	-3,0
思い切る	起・3拍	-3	(掲載なし)	0	-4,0	-4
思いこむ	起・3拍	0	(掲載なし)	0	0	-4,0
思い知る	起・3拍	-4	(掲載なし)	0,-4	-4	(掲載なし)
思い過ごす	起・3拍	-5	(掲載なし)	0	0	(掲載なし)
思い立つ	起・3拍	0	(掲載なし)	0	-2	-4
思いつく	起・3拍	0	(掲載なし)	0	(掲載なし)	0
思い続ける	起・3拍	0	(掲載なし)	0	(掲載なし)	(掲載なし)
思いつめる	起・3拍	-2	(掲載なし)	0	-2	-2,0
思いとどまる	起・3拍	-6	(掲載なし)	0	0	(掲載なし)
思いとまる	起・3拍	0	(掲載なし)	0	0	0
思い直す	起・3拍	0	(掲載なし)	0	-2	(掲載なし)
思い残す	起・3拍	0	(掲載なし)	0	0	0
思いめぐらす	起・3拍	0	(掲載なし)	0	(掲載なし)	(掲載なし)
思いわずらう	起・3拍	0	(掲載なし)	0	0	(掲載なし)
泳ぎまわる	起・3拍	0	(掲載なし)	-5	(掲載なし)	-5,0

〔いきり立つ[-3]〕〔威しつける[-4]〕は、当時このようなアクセントが実際にあったのか、あるいはここで誤記を正すことを企図したのか、不明である）

表1の内容を前部動詞のアクセント型別に整理・集計すると、表2のようになる。

表2 前部動詞の式と1943年『日本語アクセント辞典』での掲載

前部動詞のアクセント式	1943年『日本語アクセント辞典』
一. 前部動詞が平板式 (29語)	⇒ すべて起伏式に (掲載なしが2語)
二. 前部動詞が起伏式・2拍以下 (6語)	⇒ すべて平板式に
三. 前部動詞が起伏式・3拍以上 (22語)	⇒ 平板式が17語 平板式と前部型の併記が2語 前部型が1語 (掲載なしが2語)

表2から、以下のことが言える。

1939年「連語動詞のアクセント法則 (稿)」で取り上げられた57の複合動詞が、1943年『日本語アクセント辞典』で掲載された際に、

- ・前部動詞が「平板式」・「起伏式 (2拍以下)」のもの
⇒ すべて「法則に合致する」アクセント型に修正されて掲載
- ・前部動詞が「起伏式 (3拍以上)」のもの
⇒ すべて「法則に合致する」アクセント型 (= 平板式または前部型) に修正されて掲載
(ただしほとんどの語には「平板式」のみを認め、「前部型」を掲載したものはごくわずか)

この際に提起されたのは「ア～オ」で始まる複合動詞 (57語) についてのみであったが、このような演繹的な編集姿勢 [= 「規範」の提示にあたって、「実態」の考察を通して得られた「傾向」を、「原則」にまで高めてしまったこと]、すなわち「合法則的」でないアクセントの掲載を避ける態度が、この辞典所収のほかの複合動詞のアクセントを示す際にも貫かれたであろうことは、想像に難くない。

4. 『日本語アクセント辞典』と同時期の他の辞典

この節では、三宅武郎が編集に携わったアクセント辞典 (『アクセント表示 新辞海』および『日本語アクセント辞典』) と、ほぼ同時期の辞典類での掲載状況を比較してみる。

『アクセント表示 新辞海』[1938年]と『日本語アクセント辞典』[1943年]の背景については、2節で簡単にふれた。同時期のものとして、『国語発音アクセント辞典』[1932年]、『大辞典』[1934-1936年]、『明解国語辞典』[1943年]の3つがある。

○神保格・常深千里 (1932) 『国語発音アクセント辞典』

アクセント専門の辞書としては、日本初のものである。以下のような記述が見られる。

「ラジオの普及率が10%前後であった時期 (昭8・3末11.1%) に、東京語に習熟していない全国の国語教員を主な対象として、話し言葉の統一、発音統一を目指した辞書。国定

教科書の語彙および中流階級の生粋の東京人が家庭内また社交上頻繁に使用する言葉 2 万 7,000 語について、東京の発音（音韻とアクセント）を示し、詳細な解説を付けている。」

（沖森卓也ほか編（1996: 97）『日本辞書辞典』、当該箇所は菅野謙執筆）

「常深が昭六・七死去のため志村繁隆が協力」

（惣郷正明・朝倉治彦編（1977: 190）『辞書解題辞典』）

元になる原稿は常深千里が書き、最初は三宅武郎との合同出版も提案された。しかし三宅は辞退し、結局は神保格が校閲を担当した。

「国語発音アクセント辞典」が厚生閣から出版になった。之は神戸の常深千里氏が 20 年間集めた東京アクセントで、本会創立間もなく常深氏の苦心を認めて、神保氏に囑してその完成を急いだもの。不幸にして発行の日を見ないで常深氏はなくなられた。之に関しての苦心やら不満足な点を、神保氏から細かに話されたが、ともかく日本最初のものであり、本会と縁の深いものであるからそのよく売れて、第二第三と改良された書物が出ることを祈った次第である。」（「XXVIII 回研究会記事」『音声学協会会報』29 号（1933.5: 15）

「先年、故常深氏が「アクセント辞典」の原稿を音声学協会に送つて寄越され、それと合流して出版したらどうかといふことを岡倉先生から学会の席上で懇諭されたときにも、お断りして神保氏の校閲を依頼したくらみである。」（三宅武郎 1938: 29）

「「アクセント辞典」は常深氏の原稿を神保氏が校閲せられたのであるからやゝ妥協的なところがある。」（三宅武郎 1940: 126）

また、次のような記録もある。

「委員の一人である神保文理科大学教授にはアクセント辞典の名著があるが、放送協会のアクセント辞典が出来たならば廃棄してもよいとまで言はれてゐる。」（服部愿夫 1937: 21）

なお、この『国語発音アクセント辞典』は、日本放送協会でのアナウンサーの養成にあたっても使われており、協会でその後に編纂される『日本語アクセント辞典』の編集にあたって最も重要な参考資料の一つとして扱われている（菅野謙・白田弘 1979: 265）。

○平凡社編（1934-1936）『大辞典』

公称 70 万語掲載で、このうち約 5 万には、傍線でアクセントを標示している（沖森卓也ほか編（1996）『日本辞書辞典』）。以下の記述に見るとおり、このアクセントを付したのは、佐藤孝（日本放送協会に勤務（1934-1943 年）していた用語調査係員の一人）であると思われる（塩田雄大 2008）。

（昭和九年の）「五月ごろになり、大先輩兼恩師神保先生のご依頼により、先生の下職で平凡社『大百科事典』[引用者（塩田）注『大辞典』の誤記か]の見出し語にアクセント表示の記号を添付するという仕事を仰せ付かり、新婚早々の女房にも手伝わせて原稿書きをしたら、月末には初めてのアルバイト料として謝礼金（金二十円也）を送って寄越してき

た」

(佐藤孝 1991: 120)

この『大辞典』の第二十六巻には、「主なる執筆者」の一人として「佐藤孝」の名前が挙げられており、後書きに相当する部分には次のような文言が見られる。

「われわれが外国語の発音を知ってるながらアクセントが違ふために、外国人に通じないことを思ふ時、日常用ひられる標準語にはアクセントをつけねばならぬ。寧ろ当然である。然るに従来の国語辞典にはこれがなかった。困難もあつたらうが、研究が発達してゐなかつた。われ等の大辞典は、つとめて新研究を漏らさず入れるやうにした一つの現れとしてアクセントを採入れ、その道の権威者神保格先生にお願いして現代語約五万にアクセントを附して頂いた。国語辞典にアクセントを示したのは実に本大辞典を以て嚆矢であると云つても差支えないであらう。」

(「完結の言葉」『大辞典』第二十六巻)

以上から、『大辞典』のアクセントに関しては、記載の依頼を受けた神保格が、その実務作業を佐藤孝に任せたと判断するのが妥当である。

なお、ここに掲載されたアクセントに対しては、三宅武郎はあまり高い評価をしていない。

「国語辞書のアクセント表記に関する史的叙述の中で、平凡社の「大辞典」のことを書き落して見たが、同書のそれは、結局、神保・常深両氏の「アクセント辞典」の範囲を出でなかつたといふことである。」

(三宅武郎 1938: 33)

○金田一京助編 (1943) 『明解国語辞典』

見坊豪紀が「編修並びに校正」を担当し、山田忠雄が「有効適切なる補助」を行い、金田一春彦が「標準東京アクセント」を施した国語辞書である(沖森卓也ほか編(1996)『日本辞書辞典』)。見出し語にアクセントを付けようというのは金田一春彦の発案で、ゲラが上がってから一つ一つ付していった。神保格の示すアクセントと異なるものを載せるときには、神保に叱られぬよう、たくさんの実例を集めたという。アクセント記号を傍線で示すのではなく、①②といったマル数字で表示するのも、金田一春彦の考えによる(金田一春彦 2001)。

5. 複合動詞アクセントの掲載状況の対照

塩田雄大(2013)でも示したとおり、相澤正夫(1992)には前部動詞が起伏式である複合動詞のリスト(888語)が載せられている。これは、もし式保存の逆転現象に忠実に従った場合には、前部動詞が2拍以下のものは全体として平板式に、3拍以上のものは平板式あるいは前部型で現れるはずの複合動詞群としてとらえることが可能である。この888語の複合動詞について、前節で取り上げた辞典類ではそれぞれどのようなアクセントが示されているのかを、類型化してみた。

まず、前部動詞が2拍以下のものについては、各資料に掲載されている複合動詞のアクセントが平板式か起伏式か、またはその併記かという観点から分類した(表3)。また、前部動詞が3拍以上のものは、上記に加えて前部型の類型も加えた(表4)。

表3 前部動詞が起伏式・2拍以下 (716語)

複合動詞のアクセント	1932 『国語発音アクセント辞典』	1934-36 『大辞典』	1938 『アクセント表示 新辞海』	1943 『日本語アクセント辞典』	1943 『明解国語辞典』
平板式のみ掲載	293語 (90%)	240語 (86%)	157語 (100%)	521語 (98%)	398語 (86%)
平板式と起伏式の併記	4語 (1%)	0語 (0%)	0語 (0%)	0語 (0%)	54語 (12%)
起伏式のみ掲載	27語 (8%)	38語 (14%)	0語 (0%)	10語 (2%)	12語 (3%)
その他	1語 [Ⓐ] (0%)	0語 (0%)	0語 (0%)	1語 [Ⓑ] (0%)	0語 (0%)
計	325語	278語	157語	532語	464語
(非掲載)	391語	438語	559語	184語	252語

Ⓐ平板式と分離型
〔=前部と後部が
複合せず2単位の
もの〕の併記:「誉
め称える」

Ⓑ平板式と分離
型の併記:「誉め
称える」

表4 前部動詞が起伏式・3拍以上 (172語)

複合動詞のアクセント	1932 『国語発音アクセント辞典』	1934-36 『大辞典』	1938 『アクセント表示 新辞海』	1943 『日本語アクセント辞典』	1943 『明解国語辞典』
前部型のみ掲載	14語 (19%)	11語 (24%)	3語 (20%)	9語 (9%)	5語 (9%)
前部型と平板式の併記	5語 (7%)	0語 (0%)	3語 (20%)	10語 (10%)	3語 (5%)
平板式のみ掲載	41語 (57%)	25語 (56%)	8語 (53%)	82語 (79%)	30語 (52%)
平板式と起伏式の併記	4語 (6%)	0語 (0%)	0語 (0%)	0語 (0%)	8語 (14%)
起伏式のみ掲載	6語 (8%)	9語 (20%)	0語 (0%)	2語 (2%)	8語 (14%)
その他	2語 [Ⓒ] (3%)	0語 (0%)	1語 [Ⓓ] (7%)	1語 [Ⓔ] (1%)	4語 [Ⓕ] (7%)
計	72語	45語	15語	104語	58語
(非掲載)	100語	127語	157語	68語	114語

Ⓒ前部型と起伏式
の併記が2語:「叩
き起こす」「聳え
立つ」

Ⓓ前部型と起伏
式の併記:「思い
余る」

Ⓔ平板式と分離
型の併記:「祓い
浄める」

Ⓕ前部型と起伏式
の併記が4語:「困
り切る」「たけり立
つ」「叩き起こす」
「踏ん返り返る」

そして、表3・表4をもとにして、起伏式〔=「合法的」でないもの〕が掲載されているかどうかを再集計したものが、表5である。いずれも、割合については小数点以下を四捨五入して示してある。

表5 複合動詞全体のアクセントとして起伏式〔＝「合法的」でないもの〕が掲載された率

複合動詞のアクセント	1932 『国語発音アクセント辞典』	1934-36 『大辞典』	1938 『アクセント表示 新辞海』	1943 『日本語アクセント辞典』	1943 『明解国語辞典』
【前部動詞が起伏式・2拍以下】	10%	14%	0%	2%	14%
【前部動詞が起伏式・3拍以上】	17%	20%	7%	2%	34%

表5の数値から、ここで取り上げた5種の資料は、以下の2つに分類できる。

前部動詞が起伏式で2拍以下、および3拍以上の複合動詞に関して、

起伏式〔＝「合法的」でないもの〕の掲載率が10%未満のもの

：『アクセント表示 新辞海』『日本語アクセント辞典』

起伏式の掲載率が10%以上のもの

：『国語発音アクセント辞典』『大辞典』『明解国語辞典』

ここから、『アクセント表示 新辞海』『日本語アクセント辞典』の2書は「式保存の逆転現象」にきわめて忠実である（あるいは「忠実すぎる」）のに対して、『国語発音アクセント辞典』『大辞典』『明解国語辞典』はかならずしもそうではないということが言える。後者の3冊のほうが、当時の運用実態に近かったのではないだろうか。

あえて想像をたくましくすると、三宅武郎（広島出身）には、自身の母方言ではない東京語の調査・研究を通じて帰納的に「発見」した「式保存の逆転現象」に対する自負心のようなものがあったのではないか。そのことによって、『日本語アクセント辞典』と『アクセント表示 新辞海』において複合動詞のアクセントを示す際に、演繹的な操作〔＝「式保存の逆転現象」をなかば機械的に適用して、「合法的」でないアクセントの掲載を避けること〕を試み（てしまっ）たのかもしれない。

6. さいごに

本稿の目的は、決して、「三宅武郎の辞書編集態度が、当時の言語運用実態に基づかない、いい加減なものだった」ということをあげつらうものではない。

言語の「規範」の示し方に関し、一つのあり方として、（それが、場合によっては「伝統」や「運用実態」とは食い違うところがあったとしても）「なるべく単純化して提示する」という立場も、認めてもよいのではないだろうか。

たとえば、形容詞を活用させたときのアクセントは、「伝統」においても「運用実態」においても、かなり複雑な様相を見せることが、随所で指摘されている（たとえば塩田雄大（1998）、田中ゆかり（2003）など）。こうしたことをめぐって、おもに日本語教育の観点からは、「場合によっては、アクセントがゆれている場合、体系的教育に都合の良いものを取りあげ、規則を簡素化して示す

必要もあるかもしれない。つまり文法でいう pedagogical grammar (教育文法) の考え方である。」(松崎寛 2003) という重要な提案もなされている。たとえば、「規範」的なアクセントとしては、平板式形容詞「遅い」は [おそい①, おそく①, おそくて②, おそかった②, …] (丸数字はアクセント核の位置) のようになるのに対して、起伏式形容詞「高い」は [たかい②, たかく①, たかくて①, たかかった①, …] のようになっており、決して単純ではない。これを、仮にいずれも [おそい②, おそく②, おそくて②, おそかった②, …] [たかい②, たかく②, たかくて②, たかかった②, …] のようにするならば、「形容詞については、辞書形 [= 終止形] のアクセント核は後ろから2拍め [= 「- 2」] にあり、また活用形のアクセントもその位置のままである」というように「整理」することができる。言語教育用の「申し合わせ事項」としては、こうした考え方も成立しうる。「正解」は、一つではないのである。

三宅武郎もこのような考え方を意識的にしたのかどうか、またその結果として複合動詞のアクセントが上述のように示されるにいたったものなのかは、現在となってはわからない。三宅の試みは「おそらく過去にはそのような形で調和がとれていた」というような「伝統」に軸足を置いた姿勢であるのに対して、上述の形容詞アクセントの整理は「伝統」からは乖離する方向を目指している。しかし、単純なシステムを指向するという点では、両者は共通している。

また、近年の日本語教育では「複合動詞(終止形)のアクセント核は、基本的に後ろから2拍めにある」と示す考え方が少なくない(塩田雄大 2013) という現象も、「単純な規範を提示する指向」という面では、三宅の試みと同一である。

そのころの日本放送協会では、漢語の読み方をめぐって、「どちらかという漢語の伝統的な『読み』よりも、全体としての規則性(記憶上の負担の軽減)を大きく視野に入れた新しい『読み』を採用しようとしていた」(塩田雄大 2007a) ことなどを考え合わせると、三宅を含む当時の言語政策実務担当者の中に「規則性を重視した規範の提示」を目指すという観念があったのではないかということは、あながち否定できないのである。

参考文献

- 相澤正夫 (1992) 「進行中のアクセント変化—東京語の複合動詞の場合—」『研究報告集』13: 195-265. 東京: 国立国語研究所.
- 秋永一枝 (1999) 『東京弁アクセントの変容』東京: 笠間書院.
- 服部愿夫 (1937) 「最近の放送用語発音調査」『放送』7(7): 19-21.
- 平凡社 (編) (1934-1936) 『大辞典』(全26巻) 東京: 平凡社.
- 市川重一 (1984) 「放送用語史論(その2)」『千葉経済短期大学初等教育科研究紀要』7: 25-45.
- 神保格・常深千里 (1932) 『国語発音アクセント辞典』東京: 厚生閣.
- 菅野謙・臼田弘 (1979) 「放送での「発音のゆれ」45年」『NHK放送文化研究年報』24: 251-291.
- 金田一春彦 (1994) 「日本語の灯台守60年—講演と公開・放送用語委員会から— 第一部 講演「放送用語委員会と私」」『放送研究と調査』44(4): 2-9.
- 金田一春彦 (2001) 『「明解国語辞典」『三省堂国語辞典』と私』柴田武 (監), 武藤康史 (編) 『明解物語』270-287. 東京: 三省堂.
- 金田一京助 (編) (1943) 『明解国語辞典』東京: 三省堂.
- 松永典子 (2008) 『「総力戦」下の人材養成と日本語教育』福岡: 花書院.
- 松崎寛 (2003) 「アクセント教育の体系的シラバスとアクセントの「ゆれ」」『広島大学日本語教育研究』13: 23-30.

- 三宅武郎 (1934) 『音声口語法』東京：明治書院。
- 三宅武郎 (1937) 「先生と私」『言語問題 (岡倉先生追悼号)』3(3): 51.
- 三宅武郎 (1938) 「国語辞書のアクセント表記について 標準アクセント辞典の編纂方法に関する私案」『国語運動』2(5): 27-33.
- 三宅武郎 (1940) 「アクセントについて」国語教育学会 (編) 『標準語と国語教育』119-140. 東京：岩波書店。
- 三宅武郎 (1943) 『国民学校アクセント解説 第1～4学年用』東京：国語文化研究所。
- 三宅武郎 (1950) 『教育国語要説—とくに低学年の実地指導を中心として—』東京：東洋館出版社。
- 三宅武郎 (1952) 「ラジオ用語研究の過去・現在・将来」日本民間放送連盟 (編) 『商業放送講座』176-219. 東京：日本民間放送連盟。
- 三宅武郎 (1969) 「山田美妙のアクセント観」『国語講座 第1巻』8-31. 東京：白帝社。
- 三宅武郎・興水實 (1941) 『国民学校アクセント教本 第1学年用・第2学年用』東京：国語文化研究所。
- 日本放送協会 (編) (1943) 『日本語アクセント辞典』東京：日本放送出版協会。
- 沖森卓也・倉島節尚・加藤知己・牧野武則 (編) (1996) 『日本辞書辞典』東京：おうふう。
- 大西雅雄 (1951) 「美妙齋アクセントの考察」『音声の研究』7: 129-156. 東京：篠崎書林。
- 佐藤孝 (1991) 『ことのはつれづれぐさ—自伝的駄弁録—』東京：講談社出版サービスセンター。
- 塩田雄大 (1998) 「『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂 (6) アクセントは「ムズカシイ」—アナウンサーアクセント調査報告 (5) 「動詞・形容詞」」『放送研究と調査』48(12): 54-67.
- 塩田雄大 (2007a) 「漢語の読み方はどのように決められてきたか 戦前の放送用語委員会における議論の輪郭」『放送研究と調査 (NHK 放送文化研究所年報)』51: 79-104.
- 塩田雄大 (2007b) 「最初の放送用語基準 ～1935年『放送用語の調査に関する一般方針』作成の背景」『放送研究と調査』57(7): 74-89.
- 塩田雄大 (2008) 「アクセント辞典の誕生 放送用語のアクセントはどのように決められてきたのか」『NHK 放送文化研究所年報』52: 173-200.
- 塩田雄大 (2009) 「戦前・戦中期におけるアクセントの規範と放送—複合動詞にみる—」『第267回近代語研究会秋季発表大会 (松江) 発表予稿』1-8.
- 塩田雄大 (2013) 「NHK アナウンサーのアクセントの現在—複合動詞を中心に—」相澤正夫 (編) 『現代日本語の動態研究』236-258. 東京：おうふう。
- 惣郷正明・朝倉治彦 (編) (1977) 『辞書解題辞典』東京：東京堂出版。
- 田中ゆかり (2003) 「首都圏方言における形容詞活用形アクセントの複雑さが意味するもの—「気づき」と「変わりやすさ」の観点から」『語文』116: 119-95.
- 吉沢義則 (編) (1938) 『アクセント表示 新辞海』東京：三學社。

On the Accent of Compound Verbs Listed in the Dictionaries before the End of WWII: Inductive Description and Deductive Norm

SHIODA Takehiro

NHK Broadcasting Culture Research Institute / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

It is said that the accent of compound verbs takes the opposite pattern of its front verb part (Inversion Phenomenon of Pattern Preservation of the compound verb accent, IPPP). If the front part verb is non-accented, the compound verb will be accented. Conversely, when the front part verb is accented, then compound verb will be non-accented. However, there are many exceptions demonstrated in observed Japanese, and there are relatively few examples of accented compound verbs that bear an accent on the front verb.

Takeo Miyake (1934) first proposed this generalization of IPPP. In this paper, the issue of how many items fit the IPPP in two dictionaries compiled by Miyake is considered.

The quantitative results show that the accents of the compound verbs listed in the two dictionaries are extremely faithful to the IPPP. That means there is some deviation from the actual language use, as compared to the accents contained in other dictionaries from the same period.

One interpretation of this result could be that the IPPP, pointed out by Miyake as a general law, was over-applied in the description and compilation of accent dictionaries.

Key words: compound verb, accent, Takeo Miyake, norm, actual use